

ペトロのペンテコステ説教

ペンテコステの日の聖霊降臨とそれによって引き起こされた異常現象はエルサレム全体に一大センセーションを巻き起こした。ルカはその時の様子をこう記している。人々は皆、驚き、とまどい、『いったい、これはどういうことなのか』と互いに言った。しかし、『あの人たちは新しいぶどう酒に酔っているのだ』と言って、あざける者もいた。(2:12、13)。

驚きと戸惑いの中にある群衆に対して、ペトロが他の11人の弟子たちと共に立ち上がって福音説教の熱弁をふるったのが14節以下にあるペトロのペンテコステ説教である。新約聖書に記されているこの初代教会最初の説教は、ペンテコステにおける聖霊降臨という現象がどういう意味をもつかを明らかにし、また初代教会が宣べ伝えた福音のメッセージの中心が何であったかを示す貴重な記録である。

ペトロはまず、弟子たちへの聖霊降臨が、偶然に起った、訳の分からない異常な霊現象なのではなく、神が預言者ヨエルを通してあらかじめ約束しておられた「終わりの日」の救いの到来を告げるしるしの成就であることを強調する。終わりの日に神の霊がすべての人に注がれ、主の御名を呼び求める者は、みな救われる」というヨエルの預言が今や実現した(2:14? 21)。

それに続いて、ペトロはイエスの十字架の事実と、イエスの復活の必然性について、旧約聖書からダビデの詩編を引用して論証する。イエスは神から遣わされたメシアであった。しかし、人々は彼を十字架につけて殺した。しかし、神は人間のそのような反抗を逆に人間の救いの機会に変えられた。そこには人の思いをはるかに越えた神の救いのご計画があった。

十字架とは、まず第1に、そこにおいて人間の罪が最もあざやかにわらわれた出来事であり、また第2に、そこにおいてこそ人間の罪があがなわれるというすなわち、罪なきお方(キリスト)の死なしには人間の罪の贖いはあり得ないということを示す神の出来事であった。ナザレのイエスは、まさにそのようなメシアとして神が遣わされたお方であった。

イエスは十字架で死なれた。しかし、彼が死に支配されるままに在ることはありえなかった。ダビデに約束されたように、神はこのイエスを罪の究極の力である死から解放し、勝利させ、復活させられた。イエスの復活は彼がメシアであることの必然的な結果であった。彼はメシアとして死に支配される筈はなかったからである(2:22? 35)。

そして最後に、ペトロはこう結論し、激しい情熱をもって群衆に悔い改めを迫った。だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなされたのです。(2:26)。

イエスが、十字架にかかり、死に勝利してよみがえり、天に昇り、そして信じる者に聖霊を注がれたというこの一連の出来事は、イエスこそは、すべて信じる者に罪のゆるしを与える権威をもっておられる唯一のお方、すなわち、わたしたち

の「主」でありまた 弥リス卜であることを宣言する出来事であった。ペテロが大胆に証言しているように、「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていない」のである (4 :12 口語訳)。